一切の聖教章（五帖第九通）

当流の安心の一義というは・ただ南無阿弥陀仏の六字のこころなり、たとえば南無と帰命すれば・やがて阿弥陀仏のたすけたまえるこころなるがゆえに、南無の二字は・帰命のこころなり、帰命というは・衆生のもろもろの雑行をすてて、阿弥陀仏後生たすけたまえと・一向にたのみたてまつるこころなるべし、このゆえに・衆生をもらさず弥陀如来の・よくしろしめして・たすけまし ますこころなり、これによりて・南無とたのむ衆生を・阿弥陀仏のたすけまします道理なるがゆえに、南無阿弥陀仏の六字のすがたは・すなわちわれら一切衆生の平等にたすかりつる・すがたなりとしらるるなり、されば、他力の信心をうるというも・これしかしなが

ら・南無阿弥陀仏の六字のこころなり、このゆえに・一切の聖教
というも、ただ、　南無阿弥陀仏の六字を信ぜしめんがためなり
と・いうこころなりと、おもうべきものなり、
あなかしこ　　あなかしこ

一切の聖教章の大意

浄土真宗の信心というのは、南無阿弥陀仏の六字のいわれを聞き開くことです。

この南無阿弥陀仏の六字は、南無と帰命すれば、ただちに阿弥陀仏がお救いになるということです。ですから、南無という二

字は帰命であって、衆生が自力にたよることをやめ、阿弥陀仏におまかせするということであり、その衆生を阿弥陀仏がみなもらさずお救いになるということです。

このように、南無とおまかせする衆生を阿弥陀仏がお救いになるという道理ですから、南無阿弥陀仏の六字は、私たち衆生が平等に救われるいわれであるということがわかります。

そこで、他力の信心を得るということも、南無阿弥陀仏の六字のいわれを心得るということであり、一切の聖教も、ただ南無阿弥陀仏の六字を信じさせるためのものであると思うべきです。